流行する「シュタイナー」

井　上　百　子

1．はじめに

「シュタイナー」がひっそりと流行している。『共産党宣言』をもじって言い直せば、「シュタイナー」という名の幽霊が現れたというわけだ。シュタイナー教育のシュタイナーでしょ、そんなの30年も前に流行ったわよ、何を今さら、と思う人もいるかもしれない。だが果たしてそうだろうか。現在、日本ではたとえば、ジャンルを問わず非常に多くの女性誌で「シュタイナー」的なものを見ることができる。はっきりと実感している人は少ないかもしれないが、静かに、そして、確実に「シュタイナー」的なものは私たちの生活に入り込み始めている。

本稿は、現在日本において、「シュタイナー」が流行し始めていることを指摘し、その背景を明らかにすることを目的とする。そのためにまず、流行する「シュタイナー」の実例を取り上げ、現状を把握する。次に、1970年代中頃からのシュタイナー教育が当時の公教育に対置するものとして注目されたことを確認する。その後、90年代に教育改革と教育分野以外のシュタイナーへの関心が生じ、さらに、2000年代にロハスが流行するなかで「シュタイナー」的なものが静かに流行し始めたと述べる。時代ごとに流行の背景にある文脈を記述することで、文脈の変容に伴って、流行を支える着目点が変化していることが浮き上がってくる。この記述分析のために、本稿では、主に新聞・雑誌記事を分析対象として扱う。

2．ひっそりと流行する「シュタイナー」

まず、「シュタイナー」とは何を示すのだろうか。本稿で述べるカッコつきの「シュタイナー」とは、人智学を編み出した、20世紀最大の神秘学者（オカルティスト）とも称されるルドルフ・シュタイナー（1861-1925）、その人を指すのではない。確かに、シュタイナー教育（ドイツ語では Waldorfpädagogik）は彼の思想を反映させた教

育だが、現在日本で流行しているように見えるのは単にシュタイナー教育だけではなく、例えば、彼の思想を実践するバイオダイナミック農法[1]（以下、BD農法と表記）で栽培された植物を原料として作られるヴェレダ社[2]の製品であったり、シュタイナー教育の現場や周囲によく見られるようなフェルト雑貨であったりする。シュタイナーの思想のみならず、そういった思想と接点を持つ製品や生活雑貨などの「シュタイナー」的なものが広範囲において、抵抗なく受容されている現状を指し、本稿では、「シュタイナー」が流行していると述べる。現在シュタイナー教育はこの流行の一部を担っている。この点が、1970年代後半にある程度シュタイナー教育が認知されることになった時期の「シュタイナー教育ブーム」と現在の「シュタイナー」流行との違いである。

その変遷を追う前に、「シュタイナー」はどの程度身近なものとなっているのかを確認しておきたい。例えば、ファッション誌『VOGUE』のWebサイトは、ヴェレダ等のBD農法で栽培された植物を使った製品を「シュタイナーコスメ」と名付けている。そして「工業化まっただ中の19世紀末に彼〔シュタイナー〕が提唱したロハスな思想こそが…信頼できるオーガニックコスメの礎となっている[3]」と紹介する。同じくヴェレダの製品を紹介した雑誌記事に『リビングデザイン』（リビングデザインセンター、2006.1）がある。ここではBD農法を「種まきから刈り入れまでを、月や星など天体の動きに従って行う」などと説明し、ヴェレダの製品は「宇宙のエネルギーを大地から植物に伝え、その植物で製品を作る[4]」ものだとされる。また水晶の粉を雌牛の角に詰め土の中で発酵させ土壌に撒くというBD農法の一つは、「驚き！[5]」と感動を持って紹介される。これは同じ年にドイツの『シュピーゲル』誌が、同様の一農法を「シュタイナーの突飛な思いつきの一つ einer von Steiners Erleuchtungen」と紹介し、疑念を喚起させるかのように畳み掛けて「疑似科学信仰システム ein pseudo-wissenschaftliches Glaubenssystem[6]」と呼ぶことと比較すると、日本における肯定的な流行のあり方はより認識しやすいかもしれない。もちろん、自然派コスメとしてヴェレダというブランドが流行っているというだけではない。2001年に日本で公開され、2002年ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した映画『千と千尋の神隠し』の主題歌≪いつでも何度でも≫で歌手の木村弓は、シュタイナーの音楽理論に基づき1920年に考案された楽器、ライヤー[7]を使用した。この見慣れない楽器は、木村が雑誌やテレビに登場する際にしばしばシュタイナーの名前も交えて紹介された。ヴェレダの製品やライヤーは近年、一般的にも知られることになったという点において、「シュタイナー」流行の一端として考えら

れる。2007年現在、「スピリチュアル」なるものが流行している日本において、シュタイナーは疑似科学を提唱する人物というような否定的な見方ではなく、また教育に携わる人々からのみならず、例えば化粧品や音楽といった分野においても肯定的に受け止められ、一定の評価を得ている。

3．シュタイナー教育を魅力的に見せた70年代後半の背景

現在、シュタイナーの思想を背景に持つ製品などは、雑誌などの一般的なメディアにおいて紹介されている。しかし、これは比較的近年見られるようになったことであり、シュタイナーと聞けばシュタイナー教育を想起することが今でも普通だろう。とりわけ子育て中の保護者が何らかの形でシュタイナー教育の存在を知ったり、教職課程を履修する学生が授業でその名を耳にしたりというのが、シュタイナーという名を知るたいていのきっかけである。シュタイナーの思想実践の中でも、教育はその他の分野とは比べものにならないほど有名であるため、世界的に見ても、シュタイナーを教育学者として理解している人は多い。したがってこの連想は、日本にのみ見受けられる特異な現象とはいえない。

だが、日本において70年代後半以降、シュタイナー教育がある一定の層に受け入れられていた背景には、この一風変わった教育の受容を欲する日本社会の文脈がある。その背景とシュタイナー教育に関する報道は、いかに絡み合っているのだろうか。

その端緒は、75年12月に、ドイツ文学者・子安美知子による『ミュンヘンの小学生』（中央公論社）という新書が出版されたことにある。それはこの本が日本でシュタイナー教育を一般的に認知させたと考えうるからだ[8]。ここから始まる日本におけるシュタイナー（教育）の受容の変遷を追うために、本稿では新聞および非専門雑誌記事を中心に考察を進める[9]。関連書籍も参照したが、シュタイナーの思想に立ち入ることを本稿の目的とはしない[10]。本稿の目的はあくまで、日本の新聞・雑誌でシュタイナー教育や「シュタイナー」が取り上げられる社会的文脈を明らかにすることで、その流行とは何かを考察することにある。

「私がシュタイナーを知ったのは、子安美知子さんの書かれた『ミュンヘンの小学生』わたしはあれから入ったんです[11]」。こう述べるのは漫画家・萩尾望都だ。1975年末に出版された『ミュンヘンの小学生』の書評は『書評年報—1976

年―　人文・社会・自然編』（書評年報刊行会、1977）によれば、76年に七本出ている。その一つに、なだいなだの書評がある。以前からシュタイナー教育を知っていたという彼は「いろいろ、やかましく教育のあり方が議論されながら、その議論の中で、この学校の教育実践のことが、あまり紹介されないのは、つねづね疑問に思っていた[12]」と記す。ここから、『ミュンヘンの小学生』以前に一部研究者等の間でシュタイナー思想が研究対象となっていたとしても、一般に広まるきっかけは、萩尾の言葉が示すようにこの本だったと推測することができる。同書は専門書ではなく、ドイツに留学中の子安夫婦が小学生になる娘・フミを偶然入学させたミュンヘンのシュタイナー学校に戸惑いながらも感銘を受けて記された体験記である。この時、子安はシュタイナーの思想である人智学（アントロポゾフィー）については知らなかったようであるし、ましてや自らの著作が日本へのシュタイナー教育紹介本になるとは考えてもいなかったという。

新書版の体験記という形態もあいまって、この著作は1977年に6版を重ね、86年に21版、98年には38版が出ている。しかしこの本が受け入れられた理由は形態だけからは説明できない。同時代評を参照するとその理由をうかがい知ることができる。「「成績万能イデオロギーからの解放」を課題としたシュタイナー学校の実践は日本の学校教育に対する一つの批判であり、改革の視点ともいえる[13]」という評価や、テストと点数評価によって人間の価値が決められることに対するシュタイナー学校の厳しい告発は「そのままわが国の学校教育に対する著者の告発でもあろう[14]」、また「日本の文部省のお役人にぜひ読んでもらいたい本だ[15]」といった評価が目に入る。これらの書評に共通するのは、子安の著作を当時の公教育に対する批判として解釈していることだ。ゆえに、なだが「この本を読んだ人たちは、きっと、日本にもこのような学校を作りたいと思うことだろう[16]」と書評を締めくくることに不思議はない。

このような書評が書かれる背景には、どのような教育をめぐる議論があったのだろうか。教育社会学者の広田照幸は、学校がまだ評価され、教育の問題が個人の問題として解釈されていた60年代に対して、70年代前半には「学校内部への視線[17]」が登場したと述べる。ここで広田は阿部耕也を引き[18]、72年10月に『朝日新聞』が連載を開始した「いま学校で」が、従来とは異なり、教育問題を新聞が先回りして構成していくようになったという見解を挙げている。受験戦争が社会問題化され、学校教育問題は70年代前半にはすでに画一的な教育制度、教育政策の失敗に原因があると考えられるようになっていく[19]。つまりシュタイナー教育が子安によって日本に紹介されたとき、現行の教育制度が

問題視されており、それゆえ打開策となる教育、つまり「新しい教育を望む」素地が当時の日本社会にはすでに存在していたのである。

少々年はくだるが、この素地をより深く理解するために、79年の「いま学校で」に掲載された往復書簡を参照したい。この往復書簡の書き手は、数学者で60年代ごろから水道方式を提唱した遠山啓と78年度東大合格者数一位の私立灘高校校長・勝山正躬である。それは70年代の教育をめぐる議論における遠山の論理とそれに対する勝山の批判からなり、当時大きな反響があったといわれている。この連載は79年1月17日から2月9日にかけて『朝日新聞』朝刊に十六回にわたって掲載された。さらに10日の同紙夕刊には二人の対談もある。ここで遠山は、日本の学校は東大を頂点としてピラミッド型になっており、テストの点数という一つの尺度のみを人間の価値として、生徒を評価するような考え方を批判する。さらに遠山は、教育における競争、それに伴う序列付け、点数のための勉強の強制を批判し、点数廃止を求める。これに対し勝山は、遠山の意見を学者の理想論であると返答し、優等生を官僚型と名付け、反優等生を独創性を持つ子と呼ぶ遠山の現状批判は必ずしも実際に見られる現象ではなく、また点数廃止は現実性に欠け、競争心は各人に備わっているものだと述べる。往復書簡最終回に勝山は、学者やマスコミに対するお願いとして、例えば受験戦争といった刺激的な言葉を用いて、全受験生が地獄に陥っているかのような報道で世間を煽らないように求めている。70年代末、勝山が保護者に対して学者の単純な論理に惑わされるなと遠まわしに警告を鳴らすことで批判した遠山の論理――点数評価教育を批判し、独創性と個性を育てる教育を目指す――はこのとき、勝山が危険信号を出したくなるほど広まっていた。

このように、遠山を筆頭として独創性、個性を評価し、点数評価に基づく教育をその仮想敵とみなす論理が存在するところに、子安の本が上梓されたことになる。『ミュンヘンの小学生』に描かれたシュタイナー学校は、遠山が評価する前者の独創性と個性を育む教育に近い。この連載を読んで子安は、遠山と勝山の対談内容を理想と現実の葛藤と見るが、シュタイナー学校はそのどちらかに当てはまるわけではなく、点数評価なしでも実績を持つと述べる[20]。彼女は、シュタイナー教育を日本の教育の第三の道として位置づけている。しかし結局は、遠山が仮想敵とするような公教育、またの名を「普通の教育」に対置される形で、シュタイナー教育は理想教育として「神格化」されていく。

4．シュタイナー教育に関する新聞・雑誌記事
——70年代半ばから90年代前半

実際にはどのような報道があってシュタイナー学校に対するイメージができあがっていったのだろうか。80年代前半まで、シュタイナー教育についての新聞・雑誌記事はそれほど多くない。だが79年の時点で日本から相当数の教育視察団がドイツのシュタイナー学校を訪れ[21]、雑誌『児童心理』（金子書房）には79年から3年間毎年子安の文章が掲載される。ここから、主な読者である教員側からの関心や教育に携わる者の関心をうかがい知ることができる。このとき『児童心理』に掲載された記事のタイトルは「豊かな表現力を育てる家庭」（1979.12）、「子どもの個性を生かす親」（1980.9）であり、この時点ですでにシュタイナー教育は表現力、個性と共に謳われていたことも分かる。81年3月8日の『朝日新聞』教育欄に掲載された「私とこども」という子安へのインタビューで、彼女は娘の通うミュンヘンのシュタイナー学校の特徴を、日本の学校と対比して、意思を行動に移す教育であり、知は意思に先行しないと述べる。すでにこの欄にはシュタイナー学校に関する説明が全くない。つまり80年代前半までの時点で、教育現場からシュタイナー学校に対する熱い視線が向けられ、既知のものになっていたと推測できよう。

このほかに、シュタイナー教育とドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデが結び付けて語られることが 80 年代シュタイナー教育報道の特徴として挙げられる。85年10月25日の『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）には、エンデへのインタビューが掲載され、88年には『ユリイカ』（青土社、vol.20-6）でエンデ特集が組まれている[22]。エンデの父・エドガーは若くして人智学に関心を抱き、息子ミヒャエルをシュタイナー学校に通わせた人物である。日本におけるエンデの児童文学に対する人気はいうまでもなく、エンデとシュタイナー教育を同時に語ることは、彼のような作家を生み出した教育というシュタイナー教育の肯定的な印象に貢献したのではないだろうか。

1990年に子安美知子の娘・フミが『朝日新聞』に取り上げられた際には、見出しに「枠にはまらぬ個性」と書かれ、「シュタイナー教育仕込みの強烈な個性[23]」と締め括られる。ここから90年時点の新聞レベルで、シュタイナー学校と「個性」が不可分となっていることが確認できる。次に見る、90年代前半の『朝日新聞』によるシュタイナー学校報道の過熱は、「個性を育むシュタイナー教育」を前提としている。

90年代半ばまでの新聞記事で、シュタイナー教育ないしシュタイナー学校がどのように語られているのかを見てみよう。「〔シュタイナー学校は〕荒廃する学校を立て直す「救い主」と見られており、学習会に参加する公立学校の教師たちが増えている[24]」と書かれたのは、93年アメリカ、カリフォルニア州サクラメント市のシュタイナー学校紹介記事である。同市では荒廃する公立学校に対する批判が高まるなかで、シュタイナー学校が注目され、設立されたという。また公立のシュタイナー学校が設立されたとも報じられている。同年の別の記事では、「「教育の理想郷」ともいわれているドイツのシュタイナー学校[25]」と仰々しい修飾のついた記述が見られる。この記事では、シュタイナー学校が「個性を伸ばそうと」すると記し、日本で「夢の学校」と認識される理由を「日本の常識とかけ離れているため[26]」と説明している。その記事の続編では、ドイツのシュタイナー学校を体験した日本の芸術家の「理想的な教育だといわれるシュタイナー学校だが、やはり中に入ると大変だとわかった」という感想を載せながらも、「シュタイナー教育は、子どもたちの個性を伸ばすのが不得意な日本の学校教育とは対照的な「新しい教育」として、最近、関心が高まっている[27]」と紹介する。翌94年、教育欄に掲載された記事にも「シュタイナー学校での教育は、日本の学校教育の対極にあるように思える[28]」とある。シュタイナー教育に関する記事はそれほど多くはないにしろ、そのなかでは遠山が用いた図式に近い、日本の学校という仮想敵とその対称にあるシュタイナー学校という単純極まりない構図と常套句が用いられていることが見て取れる。

だが、この構図と常套句が単純すぎると批判することはあまり有益だとは思えない。なぜならシュタイナー教育は、70年代から90年代にかけてある一定層の人々にとって魅力的だったのであり、それゆえこの教育への注目という流行が生じたことが本稿の着目点と関係しているからである。『朝日新聞』で何度かシュタイナー教育を取り上げた山岸駿介は、シュタイナー教育の記事に対する反響は常に大きいという[29]——例えば、アメリカのシュタイナー学校には記事の掲載から2—3ヶ月問い合わせが続き、シュタイナーカレッジの説明会が開かれる公民館の連絡先を掲載した際には、予想を遥かに上回る問い合わせのために公民館の電話が使えなくなったそうだ——。反響を寄せた購読者が70年代から続く詰め込み教育批判記事を繰り返し読んだり、実感したりすることで、現状の教育の代替案とも映るシュタイナー教育の流行を支えていたとすれば、この構図はその人々にとって説得力のあるものだったのだ。

これまで見てきたように、76年から90年代半ばまでのシュタイナー教育に

関する報道は競争を助長する日本の公教育を批判する報道の流れのなかで、その反対に位置する教育として位置づけられることで大きな反響を得るに至った。79 年の対談で勝山が述べる点数評価を自明とする教育に異を唱える人々のなかで、シュタイナー教育への共鳴を生み出しうるような問題の捉え方と「単純な」構図は共有されていた。そしてこの前提がかなり強固であったために、森毅が子安美知子『ミュンヘンの中学生』(朝日新聞社、文庫版)解説で述べる「〔シュタイナー学校の生徒が持つといわれるような〕知的な心を持っていれば、テストに強くなるのに、それほど苦労はいらない。この点でぼくは、今の日本のテスト主義の学校にあっても、同じことが言えそうな気がしている[30]」といった意見が構図を書き換えられることはなかった。また同様に、たびたびブーム化するシュタイナー教育報道のゆとりと個性尊重へのパターン化された賞賛に対して子安が表明した違和感や、子どもたちには教えられないにせよこの教育の背後に鎮座する人智学は報道の対象とはならない[31]。この報道トピックの選択は上記の構図という当時の教育をめぐる言説への回収と読み取ることもできる。この回収の一原因として、子安自身がはじめからこの構図を用いていたことを挙げられるかもしれない。彼女はテストを「いやなもの[32]」といい、「点数のない、文章による絶対評価[33]」を肯定し、シュタイナー教育をドイツの「公教育へのアンチテーゼ[34]」だと述べているからだ。

5.「シュタイナー」流行の萌芽——90 年代後半

90 年代後半に入り、日本の公教育の変化は可視化し始める。1996 年 7 月に第 15 期中央教育審議会第 1 次答申で、子どもたちの生活現状にゆとりがないことが指摘され、ゆとりと生きる力を身につける必要性が指摘された。この提言は 2002 年の新学習指導要領実施で本格的に導入されることになる。この公教育の抜本的な変化がシュタイナー教育に関する報道にとっても重要なのは、それまでの仮想敵を敵と見なせなくなったためである。要するに、公教育対シュタイナー教育という報道による構図はこの時点でもはや限界に達した。もしも本当に「シュタイナー」が現在流行っているという初めに挙げた本稿の見解が正しいとすれば、シュタイナー教育という流行が収まったのち「シュタイナー」流行へと至る段階において、論理の転換があるはずだ。それはどのような転換で、何がその転換を引き起こしたのだろうか。

この時期シュタイナー教育に関する報道において、それ以前には見られな

かった報道が登場する。それはシュタイナー教育から「シュタイナー」への、流行の機軸変更の萌芽とも考えられる。本稿では、シュタイナー教育から「シュタイナー」への報道の関心の変化が生じるきっかけとして、三つの契機を取り上げたい[35]。まず、96 年 5 月 12 日に放映された子安美知子と子安ふみ出演の NHK 衛星第二放送の番組「素晴らしき地球への旅」である。この番組は『ミュンヘンの小学生』出版二十周年を記念してある TV 番組制作会社が制作したものだが、この番組はそれまでの多くの報道がシュタイナー教育にのみ関心を向けてきたのとは異なり、シュタイナーの思想実践が行われる教育以外の分野にも目を向けた[36]。その他の分野とは、BD 農法を実践する障害者のための共同体[37]、建築、銀行、治療療法、医学などである。第二に、96 年 11 月 30 日から翌年 3 月 30 日まで東京・神宮前にあるワタリウム美術館で開催された「ルドルフ・シュタイナー　黒板ドローイング展」である。この展覧会では「近年、“現代美術を先取りした作品”として注目され[38]」るシュタイナーが講演会の際に描いた黒板画が展示された。なお同展覧会は『芸術新潮』(新潮社、1996.5, 1996.12)、『太陽』(平凡社、1997.3) でも取り上げられた。第三に、東京ガス・銀座ポケットパークにおいて 97 年 2 月 5 日から 3 月 29 日にかけて開催された「ルドルフ・シュタイナー　建築と教育展」が挙げられる。この展覧会を報じた『毎日新聞』の記事には、「教育者シュタイナー　建築家としての新側面も紹介[39]」という見出しが付いている。最後に引用した記事が記すように、シュタイナーの教育以外の分野への影響を紹介したということは、日本においてはほとんどシュタイナー教育の創始者としてのみ報じられてきたシュタイナーが別の側面を持つという報道へと変化の兆しを見せたことでもある。その結果、公教育に対峙するシュタイナー教育という報道に代わる別のシュタイナーをめぐる報道の可能性が生じたと理解できる。

シュタイナー（教育）をめぐる報道の流れを変化させる三つのきっかけは、公教育が詰め込み教育からゆとり教育へと変化しようとする流れとほぼ同時に生じた[40]。時期が重なったのは偶然かもしれないが、この偶然が「シュタイナー」の流行を生じさせる重要な役割を果たしたことは間違いない。というのも、教育以外の分野への人智学の実践への関心が生じたことが、シュタイナー教育を含む「シュタイナー」を肯定的に受け入れるという基盤の一つを作ったと考えられるからだ。

6.「シュタイナー」の流行——2000年代の現在

「シュタイナー」は2000年代に入り、静かにひっそりとその名を隠して流行し始める。それとは対照的に、2000年代に入り、声高に叫ばれることで流行したのはロハスである。流行の生じ方に差異はあれ、両者がツタのごとく絡み合っていることは興味深い。

2001年に文化人類学者・辻信一が『スロー・イズ・ビューティフル』(平凡社)を出版し、このころから日本ではスローライフ[41]が流行り始める。この本で辻はスローを「遅い」「ゆっくり」だけではなく、「エコロジカル(生態系によい)」「サステナブル(永続性のある、持続可能な)」という意味で用い、ビューティフルは他を否定せず、優劣を競わず、ありのままを受容し、抱擁することだと定義づけている[42]。メディアを通して「スロー」が頻繁に耳に入り始めた頃、2002年4月に『*an・an*』(マガジンハウス)の増刊号として発刊された『ku:nel』という雑誌を皮切りに、スローライフ系ないしライフスタイル系と呼ばれる女性誌ジャンルが登場し、2004年にそのピークをむかえた[43]。これらの女性誌の特徴は、美容、恋愛、占いを基本的に特集せず、手間と時間とお金のかからない料理や家事にも目を向けず、自然に近く、手作りの生活を営む人々とその人のライフスタイルを取り上げるところにある。特集される人は生活に対するポリシーを持っていることを「売り」にしており、またその人物は子どもを持っていることも多い。

「シュタイナー」の話から脱線したように思われるかもしれないが、「シュタイナー」のひっそりとした流行は、スローライフ系雑誌と密接な関係にある。ひっそりと、というのはシュタイナー(教育)という名前は前面に押し出されないものの、それを学んだことのある者ならば気づく程度の写真や単語によるメルクマールが埋め込まれているという意味である。この静かな流行の例をいくつか取り上げたい。

まず、スローライフ系雑誌の一つ『ku:nel』に注目し、その2号(2002.11.15)以降何度も登場する元『オリーブ』スタイリストの山下りか[44]による「リリアン編み」を見てみたい[45]。初め、木製の器具と毛糸を使用した「リリアン編み」は『ku:nel』創刊号(vol.4、2003.11.1)で取り上げられた。リリアン編みは「シュタイナー」的メルクマールではないが、リリアンの編みひもは、シュタイナー学校の「手の仕事」という単元で作る指編みのひもと、細い筒状の編みあがりがよく似ている。またここで用いられたY字の器具は、丸みを帯びた特徴的な

形をしている。その後、山下のリリアン編みは「問い合わせが殺到、ワークショップも開[46]」かれたと、雑誌紙面で報告がなされる。彼女が講師となり、子どもを含む48人が参加したリリアン編みワークショップの模様は、別のスローライフ系雑誌『天然生活』(地球丸、No.27、2007.4)でも紹介されている。「リリアン、懐かしいですね〜」と述べる参加者は「シュタイナー」を意識していないだろうが、山下の営むような手作りのある日常に関心を抱いている。またこのワークショップにはオーガニック宅配の「大地を守る会」が関わっており、会の最後には参加者が一緒にオーガニック野菜をふんだんに使ったスープを食したという。さらに2007年2月20日から3月31日にかけて、東京・青山のクレヨンハウス店内で「シュタイナーだけがなぜモテる?」という企画があり、その企画の一つとして山下の「羊毛を使ったリリアン編み」(3月14日)というワークショップが開かれている。

ここで重要なのは、「シュタイナー」的なメルクマールと一緒に紹介されたリリアン編みが、シュタイナー(教育)に関心のない人の目を引き、人気が高まったところで、「シュタイナー」的なものとして売り出された過程である。このように手作りのある日常に価値が見出された時期に、その一つ例として紹介された山下の日常がいつの間にか人々のまねたい対象、参考にしたいモデルになっていく。そのモデルの背後には、人智学やシュタイナー教育が潜んでいるわけだが、表面的にはリリアン編みをまねるのであり、人智学を学ぶのではない。リリアン編みが流行っているように見えるというこの点こそ、本稿がこの流行を静かにひっそりとした流行と呼ぶ理由である。

こうしたひっそりとした流行が、先に見たシュタイナー教育の流行とは異なるという事例を続けて見てみたい。『Lingkaran』8号(ソニー・マガジンズ、2004.11)ではミュージシャンのbirdが日本で初めてのシュタイナー学校、東京シュタイナーシューレを訪れ、音楽療法を体験する様子が掲載されている。これは確かにシュタイナー学校の訪問記事ではあるが、90年代前半までの「シュタイナー教育」を前面に押し出した記事とは異なる。それはbirdがシュタイナー教育やシュタイナーの音楽療法を体験したことが強調されるのではなく、見出しには「音の響きの素晴らしさに出会ってき[47]」たと記されていることからもわかる。同誌ではモデルで4児の母でありシュタイナー教育を実践しているとされる日登美の日常を記事にもしているが、この特集でも彼女の日常と子育てが取り上げられているのであり、シュタイナー教育自体の特集とはいえない[48]。

2000年代に入ってから「自然であること」に高い評価を与える一因となって

いるのは、辻のスローという呼びかけを商業的に活用したLOHAS（ロハス）（Lifestyle Of Health And Sustainability の略）ではないだろうか。この概念は「1998 年にアメリカの社会学者ポール・レイと心理学者シェリー・アンダーソンがカルチュラル・クリエイティブズ…とよばれる環境や健康への意識が高い人々の存在を確認したこと」から生じたもので「健康と環境、持続可能な社会生活を心がける生活スタイルの総称[49]」と定義づけられる。日本では特に雑誌『ソトコト』（木楽舎、2004.4）のロハス特集から広まっていった言葉だと考えられる。「〔LOHAS が〕従来のエコロジー概念と異なるのは、個人の欲求を否定しない点にある[50]」と述べられるように、この語は輸入から数年経った現在の日本で、都会での便利な生活の享受は否定されず、ロハスやエコを謳う製品が消費されるためにマーケティング用語ともなっている。スローからロハスという言葉が意味するものの変容をここで軽々しく論じるつもりはない。だが、少なくとも辻の『スロー・イズ・ビューティフル』が掲げていた反グローバル化、反多国籍企業の理念は、ロハスという語の用法では意識されていない。むしろ自分の欲望に忠実であることを推奨するロハスは、当時の辻の理念的な呼びかけに反する箇所があるほどだ[51]。LOHAS の傾向は、しかしながら、スローという語が辻の手を離れた瞬間からすでに見られたものでもある。この現代の自然志向ブームのなかで、またそのブームの始まりごろから目立って、自然派コスメとしてヴェレダや Dr. ハウシュカなど BD 農法で栽培された植物を原料とする製品はジャンルを問わずさまざまな雑誌などで取り上げられている。

このように 2000 年代には、ロハスなどの自然志向が流行し、同時に、手作りとこだわりのある日常に肯定的な価値が見出されるようになった。この流れに乗る形で「シュタイナー」的なものはその名を前面には打ち出さずに、受け入れられ、今のところその流行を揺るがすほどのバッシングは起きていない。2000 年代のシュタイナーに関する報道はこの流れと関連を持つが、二つの傾向に分けられるかもしれない。一方で、有機曲面建築としてシュタイナー建築が紹介され[52]、BD 農法を用いた製品が掲載され、芸術という側面を全面的に取り上げた記事などがある[53]。これらはシュタイナー教育と必ずしも分けられるわけではないが、教育以外のものに焦点を当てている。ひっそりした「シュタイナー」の流行はこちらに分類される。他方、1988 年設立の東京シュタイナーシューレが 11 年の非公開を改めて公開を解禁し、同時期に NPO 法人京田辺シュタイナー学校も取材を積極的に受け入れ、2004 年 3 月に前者が教育特区で学校法人化したことを報じた一連の日本のシュタイナー学校についての記事がある。ま

た、この両者に追随して、カタログ的にシュタイナー教育を取り上げる『クーヨン』(クレヨンハウス、2006.11、2007.4、2007.7 月増刊号) も存在する。

つまりシュタイナー教育を取り上げる報道は現在でも存在するが、90 年代前半まで用いられていたロジックは使われておらず、その代わりに 2000 年代においては、ライフスタイルの一部として「シュタイナー」的なもののお手本となるモデルを雑誌が掲載するなど、教育に限らない「シュタイナー」的な実践への関心が見られる。ここではシュタイナー (教育) という名が必ずしも強調されない。この点が 2000 年代に見られる新たな特徴である。

7. おわりに

本稿では子安美知子の著書『ミュンヘンの小学生』出版以降、シュタイナー教育がどのように報道され、それが 90 年代後半の変換期を経て、どのように変化してきたのかを社会の文脈を踏まえて考察してきた。70 年代後半から 90 年代半ばまでは日本の点数序列を行う公教育を仮想敵とし、その対極にある教育というロジックでシュタイナー教育が注目を浴びた。だが 90 年代半ばからゆとり教育が本格的に導入されようとするなかで、このロジックは必然的に使えなくなっていく。そして同時期に、シュタイナーの思想である人智学を実践する教育以外の分野を日本で紹介する TV 番組と二つの展覧会が開催された。この流れを汲みつつ、2000 年代にはスローライフやロハスといった自然派志向のブームの一部で、「シュタイナー」的なものが匿名であるにもかかわらず脚光を浴びている。76 年以降の一連の流れを本稿では、シュタイナー教育の流行から「シュタイナー」の流行への変化として理解してきた。多少、意地の悪い見方をすれば、「個性を伸ばす理想教育」といわれてきたシュタイナー教育は各時代の日本の報道のなかでは輸入者や情報提供に関わる者による抵抗もむなしく、時代ごとの要請に従ってもてはやされてきたともいえる。さらに現在では、報道によるある種の論理への還元に対する報道される側の抵抗を目にすることはほぼない。そのため確かにもてはやされる内容と方法に変化は見られるものの、報道側がその性質上持たざるを得ない消費を促す論理に飲み込まれている感は否めない。いま、ネットのブログなどでは雑誌などでカタログ的にモデルとして取り上げられた人たちをそのままコピーしたいという欲望が見られるが、この状況を雑誌等の読み手側の抱く憧れを介した「素直な」受容と読めなくもない。このように見るとき「個性」や「独創性」を理由にその名が知られること

となったシュタイナー教育や、こだわりの生活に対するポリシーとして紹介されていくライフスタイルの「個性」や「独創性」が、実はその逆の意味を同時に含みこむようなねじれを伴っていることがわかる。だからこそ、76 年以降シュタイナー（教育）が認知され、「シュタイナー」が流行する現在まで脈々と続いてきたものを次のようにまとめられるのではないだろうか。日本における約 30 年間のシュタイナーをめぐる流行に一貫しているのは、各時代の文脈を生み出す標準的な語り――例えば、遠山が用いたような図式――に、個々の事例と意見、そして読み方までもが回収されていってしまうことであると。

これまで見てきたように、その時代特有の語り口に対する違和感の表明や抵抗が全くないとはいえない。だが、その抵抗が抵抗として機能する可能性はあまりに低い。例えば、『VOGUE』の Web サイトで「工業化まっただ中の 19 世紀末に彼〔シュタイナー〕が提唱したロハスな思想[54]」という文章を読むとき、一体どれだけの人が 19 世紀末に現代的な意味でのロハスな思想など存在せず、ゆえにシュタイナーがロハスな思想など提唱しなかったはずだと考えるだろうか。雑誌が、コピーするだけでいいモデルを提示し、シュタイナー教育一問一答としか見えないような記事を掲載するとき、そのモデルをまねするだけではない人、一つしか見えない答えを考え直そうとする人は一体どれだけいるだろうか。一定以上の人が盲目的にそこで紹介される教育やスタイルを無批判にくり返さなければ、流行と呼びうるような状況は生じないのではないか。本稿で見てきたように、何かが社会で受容されるのは、ある程度受容される素地が存在しているためだ。つまり、社会と時代から自由な流行はありえない。だからこそある流行を追うことはその時代とそこにいる人を見ることに繋がっている。一人のドイツ文学者が輸入したものは、それが培われてきた背景を持っていたのだが、輸入先の別の文脈においてはまた別の衣装を身にまとわされていった。その結果、現代日本において「シュタイナー」的なものは、少なからぬ人々にとって魅惑的なものとなっている。しかし、人を魅了するそういったイメージを一枚ずつはがし、心地のいい響きに身をゆだねるだけではなく、鳥瞰図的視点から、自らも知らぬ間にただ中に立ってしまっているかもしれないその状況を問い直すことも、時には必要なのではないだろうか。

【注】

[1] バイオダイナミック農法に関しては、ルドルフ・シュタイナー（新田義之ほか訳）『農

業講座――農業を豊かにするための精神科学的な基礎』、イザラ書房、2000 や、ぽっこわぱ耕文舎が毎年発行している『種まきカレンダー』などを参照して頂きたい。直接関係はしないが、その歴史的な問題性を扱った研究で日本語で読めるものとして、藤原辰史『ナチス・ドイツの有機農業――「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』、柏書房、2005 がある。

[2] ヴェレダ社はスイスに本社のある医薬品企業である。日本ではコスメティック・ブランドとして知られる。企業コンセプト等についてはヴェレダ社の HP などを参照して頂きたい。

[3] http://www.vogue.co.jp/beauty/060427_oganic/ （最終確認 2008.1.18）

[4] 『リビングデザイン』2006 年 1 月号、リビングデザインセンター、p.44.

[5] ibid. p.45. 水晶は鉱物であり発酵しないが、この記事には水晶の粉を発酵させると書かれている。

[6] *Der Spiegel*, 47/2006, p.186.

[7] ライヤーの説明に関しては右記の文献を参照した。子安美知子『シュタイナー教育を考える』、学陽書房、1983、p.98.

[8] また子安は同著作で第 30 回毎日出版文化大賞（教育・語学部門）を受賞している。その発表は『毎日新聞朝刊』1976.10.28、15 面で行われた。

[9] 記事検索には、国立情報学研究所論文情報ナビゲータ CiNii、国会図書館雑誌記事索引、大矢壮一文庫雑誌記事索引 Web 版、朝日新聞聞蔵Ⅱビジュアルという 4 つのデータベースを使用した。1976 年以降の新聞データベースで筆者が使用できたのは、『朝日新聞聴蔵Ⅱビジュアル』以外に、日本経済新聞『日経全文記事データベース DVD-ROM 版』（1975 年～現在）、『毎日新聞紙面検索』（1999-2002）がある。このなかで、シュタイナー関連のキーワード検索でヒットする記事が圧倒的に多いのは『朝日新聞』である。そのため本稿の引用文献にもおのずと『朝日新聞』の記事が多くなってしまうが、これは筆者の思想的背景を故意に打ち出したり、朝日新聞的な思想を批判したりする目的ではないことを断っておく。

[10] シュタイナーの思想については入門書から専門書まで多くの著作があり、日本語で読めるものも相当数ある。シュタイナー自身の著作では、高橋巌訳『神智学』や『神秘学概論』（ともに、ちくま学芸文庫）から入るのがいい。

[11] 萩尾望都・高橋巌「対談　感動することの意味――ルドルフ・シュタイナーの思想」、『ちくま』2003.7、No.388、筑摩書房、p.6.

[12] なだいなだ「教科書を使わない学校　子安美知子著『ミュンヘンの小学生』」、『波』1976.2、新潮社、p.31.

[13] 羽成秀子「たのしみながら学ぶ　子安美智（ママ）子著『ミュンヘンの小学生』」、『教育評論』1976.8、日教組機関誌、p.63.

[14] 『毎日新聞朝刊』1976.1.19、6 面.

[15] N.N.「ある独創的な教育制度『ミュンヘンの小学生』小（ママ）安美知子著」、『週刊東洋経済』1976.2.14、東洋経済新報社、p.67.

[16] なだいなだ「教科書を使わない学校　子安美知子著『ミュンヘンの小学生』」、『波』1976.2、新潮社、p.31.

[17] 広田照幸『教育言説の歴史社会学』、名古屋大学出版会、2001、p.281.

[18] 広田が引いたのは、阿部耕也「高等学校をみる社会的視線の変容――「高校問題」の

社会史の試み――」、門脇厚史・飯田浩之編『高等学校の社会史――新制高校の＜予期せぬ帰結＞』、東信堂、1992、pp.215-236. また、広田自身は阿部の意見に賛成していない。

[19] 広田照幸『教育言説の歴史社会学』、名古屋大学出版会、2001、p.283.

[20] 子安美知子『シュタイナー教育を考える』、学陽書房、1983、p.12.

[21] 子安美知子「一二〇〇字“ニッポン論” 恐怖の「教育視察団」」、『朝日ジャーナル』1979.1.5-12、朝日新聞社、p.23.

[22] この時期にエンデが特集された背景として、エンデ原作の映画『ネバー・エンディング・ストーリー』が85年3月、『モモ』は88年7月に日本で公開されたことがあげられる。

[23] N.N.「ひとプラス 1 青春の記を刊行 子安フミさん」、『朝日新聞夕刊』1990.6.30、朝日新聞社、21面.

[24] 山岸駿介「米で見たシュタイナー教育 荒廃の『救い主』になるか 試験も選抜も教科書もない独特の授業」、『朝日新聞朝刊』1993.4.19、朝日新聞社、11面.

[25] N.N.「ドイツのシュタイナー学校 芸術家3人招かれ日本文化を紹介 「夢の学校」で生徒と合宿」、『朝日新聞朝刊』1993.6.13東京都心、朝日新聞社、25面.

[26] Ibid.

[27] N.N.「生徒の自由と自主性を尊重 ドイツ・シュタイナー学校の合宿に参加し帰国 八王子の芸術家2人」、『朝日新聞朝刊』1993.8.26東京都心、朝日新聞社、27面.

[28] 山岸駿介「がっこう解体新書 自由教育思想を学び学校の改革の糸口に」、『朝日新聞朝刊』1994.8.29、朝日新聞社、7面.

[29] ibid.

[30] 森毅「解説」、子安美知子『ミュンヘンの中学生』、朝日新聞社（朝日文庫版）、1984、p.355.

[31] 81年に一度、『朝日新聞夕刊』（1981.6.19、5面）で「人智学の時代」という記事が掲載された。筆者はシュタイナーの翻訳・研究で知られる高橋巖である。この記事の主題は人智学であり、教育ではない。2007年現在でも、シュタイナーの思想を説明するのは困難だとシュタイナー教育に関する記事がさらりと触れることは多い。

[32] 『ミュンヘンの中学生』、p.132.

[33] 『ミュンヘンの小学生』、p.163.

[34] 『ミュンヘンの中学生』、p.177. また子安は西ドイツの公立校での点数評価は日本ほどではないものの、問題視されつつあることを事ある毎に記している。つまり西ドイツの公立校へのアンチテーゼということは日本の公立校にとってはより強いアンチテーゼとしてシュタイナー教育が認識されているということだ。

[35] 90年代後半に見られるシュタイナー教育に関する報道の変化として、東京シュタイナーシューレ（現シュタイナー学園）というシュタイナー学校が、すでに87年に東京で設立されていたことが明らかになったことがある。これは98年から全国34紙で掲載された元共同通信社記者・横川和夫による連載「もうひとつの道」の第六回（参照した『茨城新聞』には98年5月25日掲載）で初めて学校の許可を受けて、同校を取り上げたことに始まる。だが筆者の調べられた範囲では、『週刊金曜日』に東京シュタイナーシューレについて投稿した者があり、その投書は同誌97年11月21日号と12月19日号に掲載されている。この投稿者は同校が非公開であることを知らなかったと

思われる。この日本初のシュタイナー学校が報道を解禁したことは、大きな出来事だったと考えるが、本稿の議論に直接関係しないため、これ以上の言及はしない。

[36] この放送はその後さらに編集され、ビデオとして販売されている。NHK エンタープライズ編 21 制作、グループ現代制作協力『子安美知子さんとたどるシュタイナーの世界（全 5 巻）』、栄光教育文化研究所.

[37] この番組で紹介された共同体 Lebensgemeinschaft はバイエルン州にあるヘーエンベルクという村にある。ここでは大人の軽重度障碍者が健常者と共に暮らし、パン屋、畑などで働いている。

[38] N.N.『芸術新潮』1996.5 月号、p.128.

[39] 今井文恵「教育者シュタイナー　建築家としての新側面も紹介」、『毎日新聞』1998.3.21、19 面.

[40] ゆとり教育に関する捉え方は一様ではない。2001 年当時、文部科学省審議官だった寺脇研は一連の学習指導要領改正の発端を 70 年代初めの詰め込み教育批判に見ている。こういった批判の結果として 77 年に学習指導要領が改正され、学科内容削減が開始され、87 年の答申から 15 年かけて 2002 年の改革に繋がっていく。寺脇はこれを戦後教育の方向転換だと述べる（詳細は右記を参照した）。寺脇研「なぜ、今「ゆとり教育」なのか」、文藝春秋編『教育の論点』、文藝春秋、2001、pp.190-207.

[41] 辻がスローライフを提唱する前に「スローフード」という言葉が聞かれた。この語はまず 2000 年に秋元敦によるコピーとして「スローフードに、帰ろう。」というカゴメ、アンナマンマの CM で使われた（東京コピーライターズクラブ編『TCC コピー年鑑 '00』、宣伝会議、2000、p.71）。その後、島村奈津『スローフードな人生！――イタリアの食卓から始まる』、新潮社、2000 でこの語がイタリアで生まれた背景などが紹介された。詳しくは同書等を参照のこと。

[42] 詳細は辻信一『スロー・イズ・ビューティフル　遅さとしての文化』、平凡社、2001、「まえがき」参照。

[43] このジャンルの二台巨頭は『ku:nel』（マガジンハウス）と『Lingkaran』（ソニーマガジンズ）だと言われるが、そのほかに中心的なものとして『天然生活』（地球丸）、『Arne』（イオグラフィックス・大橋歩企画編集写真取材）があり、最近では路線変更した『暮しの手帖』（暮しの手帖社）がこれに含まれる。

[44] 2 号では山下ではなく鈴木りかとなっているが、同一人物であるため、本稿では山下に統一する。また山下以外にも『ku:nel』には、同じくマガジンハウスから出版されていた雑誌『オリーブ』の編集、制作に関わっていた人が大勢携わっている。

[45] 山下の雑貨に関する特集名とその号の「シュタイナー」的メルクマールは以下の通り。「山下りかの大人のためのリリアン編み」（vol.4、2003、pp.48-53、プロフィールにある「ライヤー」、リリアン編みの器具の一つである Y 字フォークの「フォルム」、シュタイナー教育を実践する幼稚園などで見られるメリヤスで編まれた顔のパーツのない「編みぐるみ」）、「山下りか、フェルトを作る。ごしごししたり、ぷすぷすしたり、羊さん、ごめんなさい。」（vol.12、2005、pp.46-51、手作りの「フェルト」、またこの号では彼女の子どもが「東京シュタイナーシューレ」に通っていることも記されている）、「おなべでぐつぐつ、山下りかの草木染め。」（vol.22、2006、pp.123-127、シュタイナー教育を意識した輸入業者が長い間取り扱っている「コットンガーゼ」、「レインボー染め」の糸）。

[46] 『ku:nel』vol.12、2005、p.51.
[47] 『Lingkaran』vol.8、2004、p.75.
[48] 「日登美さん、ひびきあい、助けあい　小さな瞳、あるがままに発見する毎日」、『Lingkaran』vol.19、2006、pp.20-29.
[49] 『現代用語の基礎知識 2007』、自由国民社、p.641.
[50] ibid. p.1549.
[51] ロハスの提唱者の一人であるピーター・D・ピーターゼンは「結局「最高のエゴイストは、最高のエコイスト」なんです（月刊ソトコト編集部・電通 LOHAS プロジェクト企画制作『Lohas/ book』、木楽舎、2005、p.24)」と述べている。この言葉に端的に表れているように、エコとエゴを同等のものとして捉えることを可能にするのが「ロハス」という論理といえよう。
[52] 『Studio Voice』、インファス、2000.11、pp.54-55.
[53] すでに挙げた例のほかに、Kazuo Hashiba「森の中のシュタイナー学園。　「芸術としての教育の場」を訪ねる。」、『touch of ACTUS　エスクァイア日本版 10 月号臨時増刊』、エスクァイア　マガジン　ジャパン、2006、pp.138-156 などがある。
[54] http://www.vogue.co.jp/beauty/060427_oganic/　(最終確認 2008.1.18)